**降誕前第6主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年11月17日**

**「御心のままに」**

**詩編33編10～11節**

 **33:10 主は国々の計らいを砕き／諸国の民の企てを挫かれる。**

 **33:11 主の企てはとこしえに立ち／御心の計らいは代々に続く。**

**使徒言行録21章1～16節**

**21:1 わたしたちは人々に別れを告げて船出し、コス島に直航した。翌日ロドス島に着き、そこからパタラに渡り、**

 **21:2 フェニキアに行く船を見つけたので、それに乗って出発した。**

 **21:3 やがてキプロス島が見えてきたが、それを左にして通り過ぎ、シリア州に向かって船旅を続けてティルスの港に着いた。ここで船は、荷物を陸揚げすることになっていたのである。**

 **21:4 わたしたちは弟子たちを探し出して、そこに七日間泊まった。彼らは“霊”に動かされ、エルサレムへ行かないようにと、パウロに繰り返して言った。**

 **21:5 しかし、滞在期間が過ぎたとき、わたしたちはそこを去って旅を続けることにした。彼らは皆、妻や子供を連れて、町外れまで見送りに来てくれた。そして、共に浜辺にひざまずいて祈り、**

 **21:6 互いに別れの挨拶を交わし、わたしたちは船に乗り込み、彼らは自分の家に戻って行った。**

 **21:7 わたしたちは、ティルスから航海を続けてプトレマイスに着き、兄弟たちに挨拶して、彼らのところで一日を過ごした。**

 **21:8 翌日そこをたってカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教者フィリポの家に行き、そこに泊まった。**

 **21:9 この人には預言をする四人の未婚の娘がいた。**

 **21:10 幾日か滞在していたとき、ユダヤからアガボという預言する者が下って来た。**

 **21:11 そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」**

 **21:12 わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒になって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼んだ。**

 **21:13 そのとき、パウロは答えた。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」**

 **21:14 パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行われますように」と言って、口をつぐんだ。**

 **21:15 数日たって、わたしたちは旅の準備をしてエルサレムに上った。**

 **21:16 カイサリアの弟子たちも数人同行して、わたしたちがムナソンという人の家に泊まれるように案内してくれた。ムナソンは、キプロス島の出身で、ずっと以前から弟子であった。**

1.

**先週の火曜日に南信分区の教師会が行われました。南信分区には大町から飯田にかけて15の教会と1つの伝道所がありまして、それぞれの教会・伝道所に仕えておられる牧師達が集って礼拝と祈りと学びと交わりと話し合いの時を定期的に持っています。先日の教師会で、ある教会の先生が今年度末で教会を辞任されて新たな歩みをされるということを報告されました。お別れは寂しいことですが、その先生が祈られて新しい歩みをされることが御心と示されて決断をされたわけですので、私たちも御心であると信じて受け止めて覚えて祈りました。**

**実は南信分区ではもう一人の先生が新たな旅立ちをされることが随分前から伝えられていました。その先生は海外に留学をされる予定です。今は決まっておられるかもしれませんが、そのお話をお聞きした時点では具体的にここの国のここの大学に留学をされるということが決まっていませんでした。まるでアブラハムのように行先もわからずに新たな旅立ちをされるというのです。その先生ご自身も言っておられました「前途は間違いなく多難」です。行先もわからない。どこでどのような生活をすることになるのかもわからない。言葉の問題、経済的な問題、家族の問題、不安を数え上げればきりがないでしょう。先生が相談される中で思いとどまるようにアドバイスされた方も少なからずいると思います。先生も随分と悩まれたそうです。それでもあえて困難なその道に進むことが主の御心であると信じて受け止めて先生もご家族も、そして教会も「主の御心が行われますように」と主に祈り主にゆだねられたのです。**

**考えてみれば伝道者の歩みというものは神様が行けと言われたところに行くし、行くなと言われたところには行かない、留まれと言われれば留まる、そう信じて「主の御心が行われますように」と祈りゆだねて歩んでいくものです。たとえそこで多くの困難が待ち受けているとわかっていても「主の御心が行われますように」と祈りゆだねて歩んでいくのです。そしてそれは決して伝道者だけではなくて私たちの誰もが同じであると言えるのです。**

**使徒パウロは聖霊に促されてエルサレムに向かって旅を続けました。エフェソの教会の長老たちと涙涙の別れをして、ミレトスの港を出発し、コス島、ロドス島、パタラを経由してティルスに到着しました。パウロたちは船旅を続けるために、荷物の陸揚げ、荷物の積み込みのためにティルスで7日間過ごしました。パウロはティルスの教会のキリスト者たちを探し出して、エルサレムに行くことを告げたのでしょう。すると彼らに聖霊が働き、パウロがエルサレムで多くの苦しみに遭わなければならないことが示されたのです。彼らはパウロに「エルサレムに行かないように」繰り返し、これは来る日も来る日も言ったということです。しかし、7日経って、恐らくは「主の御心が行われますように」と皆でひざまずいて祈ってパウロを見送ったのです。**

**彼らはパウロがエルサレムで困難が待ち受けていることにパウロのことを思って心配して引き留めることが御心だと思ったのですが、パウロと数日過ごす中で「この不安や心配は神様の御心ではなくて私たちの人間的な心配の思いである」ということに気づかされて、最後は「主の御心が行われますように」と主に祈り主に全てをおゆだねしてパウロをエルサレムに送り出したのです。**

**パウロたちはティルスからプトレマイスに行き、さらにカイサリアに行きました。このカイサリアの町はパウロが第2次伝道旅行でも立ち寄った町ですが、この町に福音宣教者のフィリポの家がありました。かつてエチオピアの宦官に聖書の解き明かしをし洗礼を授けて伝道をしてカイサリアの町に行ったことが8章に記されています。フィリポはこのカイサリアで伝道を続けて教会を立てたのでしょう。彼は家族と共にこの町に留まり続けたのです。**

**するとアガボという預言者がエルサレムからやって来ました。実はこのアガボも使徒言行録に一度登場しています。11：27：28**

**「そのころ、預言する人々がエルサレムからアンティオキアに下って来た。**

 **その中の一人のアガボという者が立って、大飢饉が世界中に起こると“霊”によって予告したが、果たしてそれはクラウディウス帝の時に起こった。」**

**この大飢饉を預言したアガボが今日の個所に出てくるアガボと同じ人です。彼は預言者ですからでたらめなことを言っているのではなくて神様に示されたことを言うのです。アガボはパウロの帯を取って自分の手足を縛って言います。**

**「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」（11節）**

**アガボもまた聖霊の力でパウロがエルサレムで大きな苦難に遭わなければならないことを示されてそれを身を持って伝えたのです。一度ならずも二度までも、わたしたちすなわち使徒言行録を記したルカまでもがさすがにこれはパウロを引き留めなければパウロが命を落とすと心配して、アガボもフィリポも彼の娘たちも、そしてカイサリアの教会の人々もパウロにエルサレム行きを止めるようにしきりに頼んだのです。「しきりに頼む」は「懇願する」です。「どうかエルサレムに行かないでくれ、お願いだから行かないで、思いとどまって！」とパウロの腕や服をつかみ涙を流して必死に止めるのです。**

**彼らの必死の懇願に対してパウロははっきりと答えます。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」（13節）**

**「わたしの心をくじく」の「くじく」は「粉砕する」とか「弱気にする」という意味の言葉です。周りの人たちがどれほど自分の事を愛して心配してくれているのかパウロには痛いほどその思いが伝わったのでしょう。それゆえにパウロも気持ちが揺れたと思われます。強い決意でエルサレム行きを決断して主張していましたが、さすがのパウロも心動かされて弱気になって、エルサレム行きを取りやめることも頭によぎったのでしょう。しかし、パウロは改めて聖霊によって投獄と苦難が待ち受けていることが示されているそのエルサレムにあえて行くことこそが神様の御心であることが示されたのです。**

**「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」これは自分自身のためにエルサレムに行くのではない、主のために、主イエスのために私はエルサレムに向かうのだ。そうこれはイエス様のためであるとパウロははっきりと主張したのです。このようなパウロの姿はまるでエルサレムに向かうイエス様のようです。**

**そして、パウロの固い決意の前に、カイサリアの人たちはそれでも引き留めたい思いもあったかもしれませんが、「主の御心が行われますように」と祈って口をつぐんだのです。それ以上何も言わないで、心静かに祈ったのです。それはパウロがあえて困難な道であるエルサレムへの道を歩むことが主の主の御心であると信じて受け止めて、パウロもカイサリアの人々も、さらに言えばカイサリアの教会も「主の御心が行われますように」と共に主に祈り主にゆだねたのです。**

**このパウロの姿と人々の姿からイエス様のお姿を思います。イエス様は弟子たちにエルサレム行くことを告げられました。そしてエルサレムで多くの苦しみを受けなければならないことを告げられたのです。**

**マタイによる福音書16：21節**

**「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」**

**するとペトロはイエス様をいさめて「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」とイエス様がエルサレムに行かれることを思いとどまらせようとしたのです。しかし、イエス様は非常に厳しい言葉でペトロを叱責されました。**

**「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」**

**イエス様はエルサレムへの道を歩むこと、多くの苦しみを受けて十字架で殺されることが父なる神様の御心であるとわかっていました。そして神様は3日目に死から復活させてくださることも神様の御心であることがわかっておられたのです。**

**イエス様はゲツセマネの園で悲しみ悶えて汗が血の滴るように流されて必死に祈られました。**

**「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」（26：39）。**

**「御心のままに」そう祈られて十字架につけられて死を遂げられたのです。それが父なる神様の御心であると。すべての人の罪を背負って十字架にかかって死ぬことが神様の御心であると祈りはっきりと示されました。そして「父よ私の霊を御手に委ねます」と先週共に聞いた十字架上の最後の言葉を残して息を引き取られました。イエス様は父なる神様に全てをおゆだねされたのです。**

**本日の説教の冒頭で、「たとえそこで多くの困難が待ち受けているとわかっていても「主の御心が行われますように」と祈りゆだねて歩んでいく、それは決して伝道者だけではなくて私たちの誰もが同じなのです」と申しました。**

**それは、なぜかと言いますとイエス様がそのように歩まれたからです。いや、イエス様が私たちのためにそのように歩んで下さったからです。「御心のままに」このように祈られて十字架への道を歩まれて、父なる神様に全てを御手におゆだねになれたからです。だからこそパウロは自分のために十字架への道を歩んで下さったイエス様のためにどこまでもイエス様を信頼して示された困難な道を歩んだのです。「主イエスの名のためならば死ぬことさえもわたしは覚悟しているのです。」イエス様が私のために十字架にかかって死んでくださった。教会を迫害しイエス様を迫害てきたこんな罪深い私のためにイエス様は十字架にかかってその大きな愛を示して下さった。そのイエス様のために、そのイエス様の十字架と復活の愛を伝える、神の恵みの福音を力強く証しする任務を果たすために、「主の御心が行われますように」と祈って主に全てをおゆだねしてその道を歩んだのです。そしてその苦難と困難な道は決して一人で歩むのではなくてイエス様が共に歩んで下さる道であると信じるからこそ歩んでいくことができるのです。**

**私たちの歩みもパウロと同じです。イエス様が私たちのために十字架と復活の道を歩んで下さったのです。そのイエス様の十字架と復活の愛を宣べ伝え証しをしていくのです。私たちの歩む道は前途多難な道かもしれません。しかし、私たちは一人でその道を歩むのではありません。教会の兄弟姉妹がいます。イエス様が共に歩んで下さる道です。十字架と復活の永遠の命に至る希望の道です。私たちはその道を「主の御心が行われますように」と祈って主に全てをおゆだねして共に歩んでいきましょう。**